

# そして終戦……

朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ非常ノ措置ヲ以テ時局ヲ收拾セムト欲シ茲ニ忠良ナル兩臣民ニ告ク

朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ對シ其ノ共同宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ抑々帝國臣民ノ康寧ヲ圖リ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ皇祖皇宗ノ遺範ニシテ朕ノ拳々措カサル所曩ニ米英二國ニ宣戦セル所以モ亦實ニ帝國ノ自存ト東亞ノ安定トヲ庶幾スルニ出テ他國ノ主權ヲ排シ領土ヲ侵スカ如キハ固ヨリ朕カ志ニアラス然ルニ交戦已ニ四歲ヲ閱シ朕カ陸海將兵ノ勇戰朕カ百僚有司ノ勵精朕カ一億衆庶ノ率公各々最善ヲ盡セルニ拘ラス戦局必スシモ好轉セズ世界ノ大勢亦我ニ利アラス加之敵ハ新ニ殘虐ナル爆彈ヲ使用シテ頻ニ無辜ヲ殺傷シ慘害ノ及フ所眞ニ測ルヘカラサルニ至ル而モ尙交戦ヲ繼續セムカ終ニ我カ民族ノ滅亡ヲ招來スルノミナラス延テ人類ノ文明ヲモ破却スヘシ斯ノ如クムハ朕何ヲ以テカ億兆ノ赤子ヲ保シ皇祖皇宗ノ神靈ニ謝セムヤ是レ朕カ帝國政府ヲシテ共同宣言ニ應セシムルニ至レル所以ナリ

朕ハ帝國ト共ニ終始東亞ノ解放ニ協力セル諸盟邦ニ對シ遺憾ノ意ヲ表セサルヲ得ス帝國臣民ニシテ戰陣ニ死シ職域ニ殉シ非命ニ斃レタル者及遺族ニ想ヲ致セハ五内爲ニ裂ク且戰傷ヲ負ヒ災禍ヲ蒙リ家業ヲ失ヒタル者ノ厚生ニ至リテハ朕ノ深ク軫念スル所ナリ惟フニ今後帝國ノ受クヘキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラス兩臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ヒ難キヲ忍ヒ以テ萬世ノ爲ニ太平ヲ開カムト欲ス

朕ハ茲ニ國情ヲ維持シ得テ忠良ナル兩臣民ノ赤誠ニ信倚シ常ニ兩臣民ト共ニ在リ若シ夫レ情ノ激スル所濫ニ事端ヲ滋クシ或ハ同胞排擠五ニ時局ヲ亂リ爲ニ大道ヲ誤リ信義ヲ世界ニ失フカ如キハ朕最モ之ヲ戒ム宜シク擧國一家子孫相傳ヘ確ク神州ノ不滅ヲ信シ任重クシテ道遠キヲ念ヒ總力ヲ將來ノ建設ニ傾ケ道義ヲ篤クシ志操ヲ鞏クシ誓テ國體ノ精華ヲ發揚シ世界ノ進運ニ後レサラムコトヲ期スヘシ兩臣民其レ克ク朕カ意ヲ體セヨ

終戦ノ詔書



●中野のまちのおよそ半分が焼野原となる  
(20年5月 新井町)

## 終戦

その日・その時

## とにかく、ホッとしました

とにかく終戦になってホッとしました。うちの息子は、ほんとに男のくせに気が小さいものですから、兵隊に行くのを嫌がったもので、これでもう兵隊に連れて行かれなくてすんだと思って、それが一番うれしかったです。

(斉藤千代・47歳・主婦・野方町)

またどうせ戦争を  
始めるでしょ

あんまり負けたこと深く感じなかったです。日本はいつでも勝ってきていたから、負けても、ちょっとの間のマネ事位にしか考えていなかったです。またどうせ戦争始めるだろうから、という気持ちがありました。

(田村なか・57歳・主婦・昭通)

## 泣けて泣けて、悲しくて

悲しくて悲しくて、泣けて泣けて、勝ってる、勝ってるなんてばかり言って、どこどこを占領したなんていって。でも日29が初めて来た時、もうダメだと思っただけです。

あんなにみんな一生懸命やったのにと思うとほんとに泣けて仕方がなかったです。

(朝比奈政子・36歳・助産婦・千光前町)

電燈がつく、サイレンが  
鳴らない

昼間はまだ何が何だかわからなかったけど、夜になってもサイレンが鳴らないんですから、これはウソみたいなもんです。電燈はつくし、防空服着ないで寝ら

れるし、ああ戦争が終わったということはこういうことなのかと、気分がすーとしたのを憶えています。

(匿名・主婦)

## とたんに力が抜けて

私は、終戦の日には、まだ海軍にいて下北半島の山で防空壕掘っていました。そこへ人が来て、もう戦争は終わったんだって、何言ってやがるんだってそれがほんとうだと思ったとたんに力がぬけてしまって、防空壕がぜんぜん掘れなくなっちゃった。虚脱状態というんでしょうか。

(田中清三郎・25歳・衛生兵)



●新井薬師附近(20年) <和田廉三氏提供>

## 今晚から楽に寝られる

ああ、やれやれと思いました。毎晩、毎晩、小さな子どもたちに防空服を着せて、空襲のたびにおぶったり、手を引いたり、逃げまどったから、ああ、今晚から楽に寝られると。

(匿名・主婦)

## 日記帳も家計簿も焼いて

終戦の日、何だかみんな全て終わったような感じがして、当時の日記から家計

簿から、献立表まで焼いてしまいました。今思うともったいなかったなと思うんですけど、その時は何かそうしなければならぬように思いました。そんなもの持っても、もうしようがないような気分だったんです。

(匿名・主婦)

勤労働員の終りは  
お汁粉一杯

終戦の日は、八王子の糧秣廠の近くの山の中で勤労働員してました。ちょうど昼休みで、民家の庭で丸くなって昼めし食っていたんです。玉音放送は、ガチャガチャ雑音が多くてよくわからなかったけど、急に兵隊が泣き出して、「日本は負けたんだよ」って。そんなバカなってみんな信用しなかったけど、本当だと知ったら、みんなあわてちゃって、どうしていいかわからないわけです。悲しいとかくやしいとかいう気持ちじゃなくて、一瞬びっくりしたんですね。

放送が終わったら学生全部集められて、もう明日から手伝ってもらわなくてもいい、学校に帰るなさいと。それで一列に並んで学校に帰ったら、こんなでつかい釜にいっぱいお汁粉つくってあって、兵隊がみんなに一杯ずつくれるわけです。もうある程度わかっていたんでしょね。

(大塚敏行・中1・勤労働員・野方町)

## ああ、この子を兵隊に

終戦の日は、お盆休みで私、家内と子どもが疎開していた栃木県の実家に行つてまして、みんな集まっていたんです。ラジオはあまりよく聞きとれなかったんだけれど、どうも戦争は終わつたらしい、と言うと、家内が「ああよかった、よかった」と大きな声で。このまま戦争が続いていたら子どもたちがいずれ兵隊にとられるかと思っていたんですね。子どもたちはまだ学校にも上がってなかったんだけれど、あんなにホッとしたことはなかったと今でも家内は言いますね。

そこにいたお百姓さんたちも「よかった、よかった」って、誰1人としてくやしがる人いなかったですよ。

私は4、5日は悶々としてましたけどとにかく穏やかなんですよ。夜は堂々と電気はつけられるし、ゲートル巻かないで寝られるし。

(池田正夫・28歳・店主・江古田)



●焼跡で(20年5月 神明町にて)

〈村田幸子氏提供〉

## 終戦の夜、特攻命令

終戦になった日の夜、「出撃、準備せよ」という命令がきたんです。死ななくて終戦になっちゃったことで、変な気持ちになっていた時ですから、早速250キロの爆弾2つ積んで、隊員の爪と髪の毛、遺書を戦隊本部へ持って行って、全て準備をすませて寝ていたら、夜中の2時頃に師団から電話が入って、「出撃中止」。

本土決戦用の特攻部隊でしたが、とうとう飛ばずじまいで、こうして生きてるわけです。

(田中耕三郎・22歳・特攻隊長・鷺宮)

## 勤労働員で負傷して

お昼に天皇陛下のお話があるって聞いてですね。そしてもって聴いた時には、ほんとうに力負けちゃったです。その玉音放送聴いてわかったです、ああ負けたんだ、とにかくここで戦争は止めて、一応早くいえは降伏っていうふうに。今まで順調にきてたわけで、それまで降伏したことないですからとにかく、それ聴いた時帰りにもう、歩いて来たかなんだかわからなかったです。力が抜けちゃってね。何のために怪我したのかね。国のために怪我したんだけど、亡くなった

人はもつと気の毒だと思ったですね。でもとにかくあの戦争ぐらい、ああいうふうに人の心が一致団結したってことは、今後ありえないんじゃないかと思うんです。

(杉田健・36歳・中島飛行機臨時工・上高田)

## 何もかもが悲しかった

兵隊だったからか、もうあの放送聞いた時は、涙がとまらなかつたです。

天皇陛下の声聞いたの初めてでしょう。ご真影はよく拝んだけど、ちょっと開いてさあーとしまっちゃう感じだから、あんまり人間だと思っていないようなところあったから、もう声聞いただけでおそれ多くて。何もかもが悲しかったですね。

(匿名・徴用)

## 東京に帰れないのでは…

あの放送は、学童疎開で行っていたお寺で聞きました。でも東京から離れているから、ほんとかなあーという気持ちが強くて、半信半疑でした。でもこんな放送があるんだから、きっとほんとうだろうということになると、このまま東京には帰れないんじゃないか、うっかり外にも出られないんじゃないか、とかいろいろ心配しました。

(八並瑞枝子・31歳・教師・野方町)

## 家に帰れる！

16日に先生から玉音放送の説明がありました。学寮の玄関前の外に立たされていたので暑くてたまりませんでした。とにかく今は、この戦争を一時お休みにして、また改めて何時かやり直しをすることに決まった。だから君たちは親元に帰ってその時が来るまでしっかり勉強をするようにといった意味でした。私はその「親元に帰って」の言葉だけは聞き逃がさず、東京に帰れるんだな、お父さん、お母さん、兄ちゃん、弟、妹に間もなく会えるんだな、嬉しいな嬉しいなと心がワクワクしてしまいました。でも顔には現わさないように必死に耐えたことを思い

出します。

(中島恵子・小6・集団疎開「ある少女の集団疎開日記」より)

## その日まで信じていた

あの日になっても私はまだ勝つと信じていたから、終戦の詔勅を聞いて、近所のおじさんが来て、「とうとう来るべきときが来ましたね」って言ったんです。でも私も父もカンカンに怒って、「何ということだ、来るべきときが来たとは何事か」と。その位信じていたんです、勝つことを。

(下野和子・16歳・宮園通)

## いやに静まりかえって…

近所の人が、何か天皇陛下から、重大な話があるというので、大人といっしょに、たしか神社か何かに集まりました。子どもでしたからね、よく覚えていないんですけど、子ども心にも何かいつもと違うなという感じで。普通だったら、空襲警報解除なんていうと、それと、遊びに出たものですけど、大人がみんなうつ向いてまち全体が、いやに静まりかえっていたから、コソコソ遊びましたよ。

(匿名・7歳・男・橋場町)

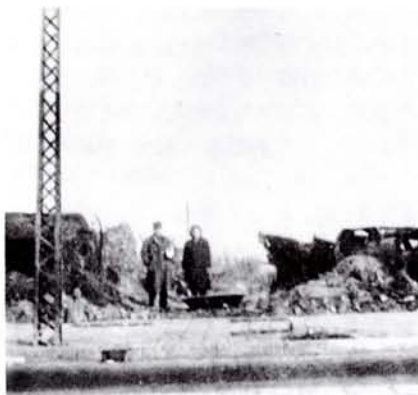


●焼跡の金庫(20年5月)〈山崎清司氏提供〉

## 「神風」はなぜ吹かない

急に終戦だと言われても、信じられなかったですね。なんで、「神風」が吹かないまま終わってしまったのか、という思いにひっかかっていました。

いつか必ず「神風」が吹くと信じていましたから。いつ吹くのか、いつ吹くのかと。サイパンが玉砕して、米軍が鹿島灘だか九十九里浜だかに上陸するという噂が流れた時も、神風が吹くんじゃないかと思っていたんです。これを1人や2人じゃない全体で信じていたんですから。ほんとに不思議ですね。今思うと「神風」



● 本町通一・二丁目の焼跡（20年）

はアメリカの方に吹いていたようで。  
（古沢秀介・15歳・宮園通）

## アメリカ兵が来る！

玉音放送を聞いて、ああ、今夜からゆつくり寝られるね、なんて言っていたら隣組の人がかけ込んで、「アメリカ兵が来る、女はみんな危い、男に変装しろ」って言うんです。女学校に行ってた娘がいたので、娘のせんとくものは取り入れるし、娘を押し入れに寝かせる支度をしたり。  
（匿名・主婦）

## 牛と割腹自殺

終戦当時は私、都の下水道局に勤めておりまして、8月15日は宮城前広場で下水道工事をやっておりました。

陛下が何と言っても疎開していられないので、軍としては、それでは何としてでも宮城を守ろうということになって、あそこへ高射砲陣地を築いていたわけです。ところがあそこは水が出て地下壕が掘れないので、私どもが行って工事を手伝っていたのです。

終戦の3日前に、その陣地の隊長から突然全員集合の命令が下って、そこにいた兵隊も人夫も私たちもみんな集まりました。そこで隊長が、近いうちにみんながあつと驚く事態が起こるだろう、あなたたちは大変国家のためにご苦労であった、みんな一回家へ帰ってこいと、昼夜兼業でしたから、2日間だけ暇をやるからと言うわけです。みんな何も知らないから喜んで家に帰って、2日後の朝戻って来ましたら、正午に陛下から直々放送があるから、どこでもいいからラジオのあるところに行って聞くようにと、こういう命令が下ったわけです。

これはいよいよ一億総玉砕だろうと、2日間の休暇をくれたのはそのためだろうと、敵はもう房総あたりに来ていて、

いっきに宮城を攻めようとしていて、決戦の構えだろうと、中には、何だか戦争は負けらしいという者はいたんだけど、そんな馬鹿なことはない、陛下はきっとみんな陛下のために死んでくれというに違いない。まあそのようにみんな思っていたわけです。

ところがあの玉音放送でしょ。みんな気が抜けて、さあ、どうすると。まあとりあえずは、まず陣地は解散しろ、武器も書類も焼けということだから、呉服橋の本部まで帰ってみんな書類焼いて。

あの東京駅の前に国鉄のビルがありましてね。あそこの職員なんかビルの窓からどんどん書類を道路にぶん投げて、道路で書類焼いていましたね。すぐに敵が上陸してくるから、それまでに焼かなければと、みんな焼きました。

その時一つ困ったことがありまして、実は陣地工事の人たちの食糧調達のために、牛が2、3頭いたんですが、この牛をどうするかということになったのです。食糧のない時だから、牛の肉は食べたいしなあ、なんて言っていたら、隊長がお前たちにあげるから好きにしなさいと言うわけです。じゃあということで、みんなで呉服橋の本部まで牛1頭つれて来たんです。

ところが牛肉は喰いたいけど、牛を殺せる者がいないんですよ。盾間を一撃すればいいなどと話はしても、誰も殺せない。考えた末に、マンホールに入れて首

だけ出してぶん殴つたらと言う者がいたんで、マンホールの入口につれて行ったんだけど、牛のヤロウ、どうしても入ってくれないんです。そうしているうちにもう日が暮れてしまって、みんな家に帰っちゃった。私は責任者だったから、どうにかしなけりゃいけないんだけど、中野の家まで牛引っぱって帰るわけにいかない。早く家には帰りたし、家でも心配してるだろうと思うから。

とうとうまた宮城前広場まで、よいしょ、よいしょと1人で牛引っぱって行って、元のところに縛って、逃げて帰ろうとしたんです。ちょうどその時、3人の将校が、二重橋の前で軍服ぬいで、軍刀で割腹自殺を。私、そばまで行って見たら、やっぱりあの隊長と少尉2人でした。もう息はありませんでした。まだ若くて隊長は中尉、27、8歳、少尉は25歳ぐらいでした。

たまたま私は牛で苦労して半日過ぎちゃったけど、あのまま隊長のそばにいて、これで日本も終わりだから、いっしょに国に殉じようという声でもかかったら、あるいは私も死んでいたかもしれないと、その時思いました。

だって10年近くも戦争して、今までの苦労は全部水の泡になったわけですから。

（関田正・41歳・都職員・上高田）

# VOICE

声

## 思い返せば…



# ● 宣戦布告を聞いた日

思い返せば……

16年12月8日、日本は全世界を相手に戦争を始めた。その最初の戦果は大々的に宣伝され、人びとは勝つことを信じ、まっしぐらに進むことになった。その時、中野の人びとは……

### もうあたり前

宣戦布告といっても、その頃は、しょつ中戦争があったから、別にめずらしいとも思わないし、驚きもしなかった。もうあたり前のような、また始まるだろうと思っていましたから。

(田村なか・57歳・主婦・昭和通)

### いよいよという感じ

蘆溝橋事件が起こった時は、これは大きな戦争になるなと思いました。だけど負けるとは。真珠湾攻撃の時は、いよいよという感じでした。当時、東条さんがよく演説していたのを新聞などで読んでいましたから。

(児玉哲二・49歳・会社員)

### いつ召集令状が…

「米英と西太平洋において戦争状態に入り…」ってラジオで放送されたけれど、どの辺りかわからないし、戦争つてものがどんなことかわからない。ついにやっただなという感じだけでした。それよりも自分にいつ召集が来るかなって、そればかり考えていました。甲種合格もらっていましたから。

(田中清三郎・25歳・衛生兵)

### ピンと来なかった

開戦当時、私、小学校3年生でした。朝登校する時、並んで行くんですけど、アメリカと戦争始めたんだってって高等科の人が言っているのを聞いて、大きな

国とケンカしても勝つのかなあ、なんて思っていましたね。その日は朝礼で校長先生から、やっぱりその話ありました。でもあまりピンと来てなかったみたいです。

(大塚敏行・中1・野方町)

### 子育てに懸命で

真珠湾攻撃の時は、ちょうど次女が生まれた時で、上に2人いましたから、もう子ども育てるのに一生懸命で、戦争がどうなのか、そんなことはあまり考えなかったです。それから戦争が激しくなるにつれて、産めよふやせよで、結局5人産みました。

(匿名・34歳・主婦・本郷通)

### 始まったかと

始まったかという位で、はっきりした意識はなく受けとめていました。その時13歳でしたけど、物心ついた時がすでに戦時中で、ずっとそんな教育受けていましたから。

(加藤操・17歳・富士見町)

### 真珠湾攻撃で万歳

真珠湾を攻撃して、やっつけたという放送を聞いた時は、思わず飛び上がって万歳を叫びましたね。だって、いつかはやるだろうと思っていたけど、こんなにうまくいくとは思っていなかったし、今の言葉でいえば、非常にカッコイイ感じだったんですよ。この調子でいけばぜったいうまくいく、と確信しましたしね。あんまりその気持は長く続かなかったけど。

(匿名・会社員)

# ● 敗戦を感じた時…… どこで？ なぜ？

戦争に負けるなどと――

「思ってもみなかった」

「言っただけで非国民扱いされた」…

「言っただけで非国民扱いされた」…

厳選されたわずかな情報を、しかも一方通行でしか与えられなかったから、最後まで勝つことを信じ、勝つまではと頑張った人びと。

でも、ある日突然、心の片隅に小さな黒点が宿り、それが日増しに大きくなって、いつか確信にまで広がっていった人も多かった。

中野の人びとにとって、それはいつ、どんな時だったのか。



## ガダルカナルの撤退

勝つ負けるといふ問題の判断を一番痛切に国民が対決させられたのは、キスカの撤退とアッツ島玉砕の時じゃないでしょうか。18年の5月の末ですか。その時初めて“玉砕”という言葉が出て来たんです。その前にガダルカナルの撤退があって、日本に被害が出たということを経験で読んだ時、ほくは非常に不安な気持ちがしたのを憶えています。19年の夏サイパンの時は、初めて民間人の犠牲者が出ましたから、もうほとんどみんな日本の危機を感じたと思いますね。

(竹中俊祐・16歳・城山町)

## あれっ、木の飛行機だよ

小学生の頃に、成増の飛行場を友だちと自転車に乗って見に行ったことがあるんです。そこに並んでいたのはピカピカの飛行機ではなくて、みんな木製の飛行機だったんです。「あれっ、木の飛行機だよ」って友だちとびつくりして。子ども心にとても淋しい感じがしたのを覚えています。これでは勝てないという予感のようなものがありました。

(大塚敏行・中1・野方町)

## 火鉢の金具まで供出だなんて

あれはいつ頃からですか、からだの弱い人まで戦争にかり出すようになりましたね。こりゃもうダメだと思いました。釣り鐘から火鉢の金具まで供出だなんて、もう望みないと思いました。

(石川千代・44歳・主婦・江古田)

## 叔父を恨みながら

5月の空襲で焼けて何にもなくて、仮住居にいた時、叔父が洋服持って来てくれて、その時、「ダメなんだよ。日本は負けるんだよ」と言った時に、ショックというか、ものすごく叔父を恨みましたね。何てことを言う叔父だと。負けるなんて言葉、ユメユメ思っていなかったんですから。でも、それから少しですが頭をかすめるようになりました。

(原田雅子・16歳・城山町)

## 松の根油だなんて

転がり落ちそうな山へ行って私たち松の根つき掘って、油絞ってね。それで飛行機を飛ばすというんでしょ。ガソリンがないから。これはもう戦いは負けだと思いましたね。松の根つきをそのまま燃料にするならわかるけど。男手も少ないから、子どもをおんぶしたような女ばかりの力で、松の根つきって、そんなに簡単に掘れるもんじゃないですよ。忙しいお百姓さん、それもお年寄りが仕事休んで掘りに来るの。

ほんとにあんなもの使って飛行機とばしたのかしら。

(清水嘉代・36歳・主婦・江古田)

## 台湾沖海戦の話

私のすぐ下の弟が横浜の航空隊に入りまして、アッツ島玉砕ですぐキスカ島に飛んで行ったのですが、その時初めて、人には言いませんでしたけど、戦争の前途に暗いもの感じました。ラジオは盛んに



軍艦マーチなんか流しているけど、弟はそのあと台湾沖海戦で空母に乗っていて海に放り出されて、巡洋艦に助けられたりしたその話を聞いて、もう絶望的だと思いました。

(匿名)

## 日本の軍艦が少なくなる

私は当時、海軍にいました。海軍は陸軍と違って、転勤があるんです。船から陸に上がったり、陸から船に行ったり、船同士の転勤もある。転勤していると、今残っている船はどことどこに何と何、という情報が読めるようになるんです。ですから18年の6月頃には「もう負けるな」と確信しましたね。それ以前にガダルカナルがやられ、そこから小さな島での海戦、アッツやソロモンでも日本の軍艦がずいぶんやられましたから。

(田中清三郎・25歳・衛生兵)

## 原爆

広島に原爆が落ちてから、はじめて日本は弱いな、こりゃあやられるなと思いました。

(田村なか・57歳・主婦・昭和通)

## 竹槍でアメリカ兵を

最後の方になって、竹槍持ってアメリカ兵が上陸してきたら突くんだといって訓練したりしましたね。ああ、これは終わりだな、勝ってる勝ってるなんてウソだと思いましたね。

(朝比奈政子・36歳・助産婦・千光前町)

## 厄年だから

開戦の時、天皇陛下がたしか42歳だったと思います。厄年だからこれは負け戦だねなんて、よるとさわると言っていましたね。

(鈴木ヤエ・主婦・江古田)

## 硫黄島玉砕

終戦の年の2月頃に硫黄島がやられた、あの時に、もうこの戦争はダメだと思った。これは何としても男が頑張らなければと思っていたけど、空襲にあうたびに確信が深まって、原爆投下されてからは、もう力出ませんでしたね。

(池田正夫・28歳・商店主・江古田)

## 未帰還機に青年が

19年頃になると、大本営発表の後に、どこの国の船を何艘沈めたとか、わが方の未帰還何機とか、わが方の損害軽微なりとか放送されたでしょ。初めはあまり感じないで聞いていたんですけど、従弟が、あの未帰還機には、必ず19や20歳の青年が乗っているんだよと言ったんです。それを聞いてから、ずっと戦争って何だろうと思うようになりました。何となく負けるような感じがしていました。

(匿名)

## 国電の中

あの当時は、ほんとに兵隊さん万能だね、兵隊さんじゃなければ人間じゃないような。まだ太平洋戦争が始まって間も

なくの頃だったと思うけれど、電車に乗ったら、ほくが教練を教わったりした若い将校が乗っていて、そこへ年とった上等兵が乗り込んできたんだ。何か話しているうちに、ストーンと若い将校がその人をぶん殴ったんです。人前で、国電の中で。それ見ていて、これはダメだと思ったね。こんなことやってるようじゃ、どんな風になるかわからないなと思った。

(上山輝一・46歳・区議・宮園通)

## 学童疎開から帰って

むこうから兄が、自転車で迎えに来てくれた。伯田が道端に立って待っていてくれた。「おかえり」といって伯田が私を抱きしめた。

その夜から、私は病気になった。その夜、おみやげのコーヤドゥーフとシャケカンで五目御飯をつくって、みんなでささやかなお祝をしてくれた。しかし、私の胃はほとんどうけつけなかった。夢にまでみた家庭のごはんだった。食べたくて食べたくて仕方がない。それなのに胃が動かなかった。もはや夕食を消化する余力を私の胃はもっていなかった。消化力はひどくおとろえていたし、胃の許容量は極たんに小さくなってしまっていた。気のぬけた廃人のような私は2、3日することもなく、おかゆを食べて物干しにすわり、ボンヤリ日なたほっこををしていた。何もかもが変わってしまった。この時、私は初めて「敗戦」を感じたのだ。この時まで続いていた少国民の気負いは完全にこわれてしまった。

(志平依久子・小6・「ある少女の集団疎開日記」より)

# 立ち上がる

# 区民



●富士山が大きく見える。高根町の高台より谷戸小学校方面を見る（20年冬）〈古沢勇士氏提供〉

精も根も尽き果てた後の終戦であった。家を焼かれ、家族を失い、あるいはバラバラのまま、とにかく長く苦しかった戦争は終わったのである。区内は家屋も人口も約半分に、見渡す限りの焼野原であった。

敗戦、占領という初めての経験は当座人びとを不安にし、流言蜚語などが飛んだがそれも次第に消え、生きるための闘いが始まった。以前にもまして厳しい食糧難やインフレが押しよせ、人びとは、力をふりしぼって新しい生活に立ち向かっていった。

生活の上での戦争はまだ終わっていなかった。



## バラック

とにかく人びとは生きて行かねばならなかった。焼けあとから材木やトタン板を拾ってきて、バラックを建てて雨露をしのいだ。防空壕にちょっと手を加えたり、焼け残った土蔵に住む者もいた。焼けあとや道路を掘りかえして菜園をつくり、古材を燃料に雑炊やすいとんを作って食べた。

## 占領政策

終戦とともに連合軍の本土進駐が始まった。8月28日、先遣隊が厚木飛行場に第一歩を踏み、中野区には8月末の未明、中野駅北口の陸軍兵営に予告なしに進駐。

8月30日、帝国海軍航空隊の中心基地である厚木飛行場にマッカーサー到着。9月9日、「日本管理方針」を発表。「間接統治方式と自由主義の助長」を示した。

これを推進するため、マッカーサーは五大改革（婦人の解放、労働組合の結成奨励、教育の民主化、秘密司法警察制の廃止、経済の民主化）を指令。さらに、10、11月にかけて神道と国家の分離、天皇の神格化の禁止、皇室財産の凍結、教科書の改訂、農地改革、財閥解体などの民主化指令をたて続けに出した。

## 流言蜚語

アメリカ兵が来ると乱暴される、捕虜にされる、南方諸島に流される、などのうわさが流れ町会を開いて対策を練るところも出てきた。しかしさしたることも起こらなかった。

「ある朝、わたくしの住んでいる東京中野区の区長さんが、『町の人々は不安でたまらず、とくに女の人たちは家財道具を背負って逃げ仕度です。人心は動揺しています。どうしたものでしょう。』と、わたくしが戦争中、町会長をやっていた関係から相談にやってきたのであった。わたくしは、『進駐軍は勝利の軍隊です。勝利者は厳正な規律をまもって敗戦国民に威厳を示そうとするものです。少しぐらい乱暴者も出るかもしれないが、まあ、落ち着いておって大丈夫でしょう』と答えたら、やや安心して帰っていった。町の人々も、『町会長さんがああいうんだから、安心していてもいいだろうよ』とわたくしの言葉を信用してくれた。」（蝦山正道記）

（中央公論社「日本の歴史」②6より）





●(左)焼けた木やトタンで作ったパラッ  
フ(20年頃 新井町)〈遠山栄一郎氏提供〉  
(上)パラッフが軒を並べて  
〈毎日新聞社提供〉



●(左)いもは米の代替物、いも10kgで米2升がさし引  
かれた(21年)〈毎日新聞社提供〉  
(上)久しぶりの米の配給に笑顔が…(21年)  
〈毎日新聞社提供〉

## 食糧事情

戦後最大の問題は食糧不足であった。空襲による流通の悪

化、農家における肥料・機具・労働力不足、加えて農民の供出意欲の減退、続く気象異変、輸入停止、復員や疎開学童の帰京などによる人口増加が重なって最悪の事態となる。配給制度は続いていたが、20年7月から1人2合1勺に減らされた米も代用品に変わり、それも遅配続きとなる。そこに空前のインフ

レで、「一千万人餓死説」が流れるほどであった。餓死対策国民大会、米よこせデモ、食糧メーデーなどが各地で起こった。

区内では篤志家によって「中野区戦災者救済協力会」が結成され、21年5月から半年間、占領軍の残飯配給を行い、区民の大半がこの恩恵を受けた。22年7月には主食の遅配は26日に達した。人びとは栄養失調となり、闇を否定した者が餓死したというニュースも流れた。



●(上)各家庭に配布された「生活用品公定価格表」の表紙(24年)  
〈香田信弘氏提供〉  
(下)中野駅北口の闇市(21年頃)〈氏家氏提供〉

## 闇市

ガレキと廃虚の中での物資不足は全ての物価を闇価格にしてしまった。

終戦からわずか5日後の8月20日、新宿で都内最初の露店が開かれた。その後主要駅を中心にまたたく間に全都に広がり、中野では10月頃中野駅北口で東中野の食肉商が焼鳥屋を始めた。

これをきっかけに、北口では食料品はもちろん、日用品、雑貨、衣類などさまざまな露店が出て青空マーケットができた。

区民は、この闇市によって生活物資を得ようとしたが、いずれも値段は高く、生活は苦しくなるばかりであった。

都内での闇市は21年をピークに22、23年頃まで隆盛をきわめ、21年7月末で60,000軒にも達したと言われている。構成は、テキ屋19.5%、素人露店商79.8%で素人が圧倒的に多かった。

当初は、当時の特殊事情のため規制はゆるやかであったが、あまりの急増に警察が取締りを強化したことや商店の復活などで徐々に減少していった。GHQ(連合軍総司令部)の撤廃指令により26年末までに露店は消滅した。



●買い出しはまず電車に乗るのがひと苦勞 (21年) <毎日新聞社提供>

## 買出し

闇市場の露店商は、公定価格の数十倍もの値段で売っていたため、闇でも買えない庶民にとって残された道は、買出しであった。しかし空襲で被害を受けた鉄道はなかなか回復されず、運行本数は極端に減少していた。中央線は比較的被害は少なかった方であったが、人口の流入と相まって、朝夕は乗車率300%というすさまじいもので、買出しもまた戦争のようであった。特に西武鉄道(現・西武新宿線)沿線は農村地帯が多かったため、もっぱら買出し電車のようにであった。

目的地につくと三拝九拝して代金に品物をそえ、やっと野菜少々といった具合であった。戦災を免がれた思い出の品、愛着の品は少しずつ食料に変わり、タケノコ生活となっていった。

## インフレ

戦時下では、強力に軍需産業を押し進めるために無制限に公債を増発して政府資金をばらまき、戦後は復興と救済のために膨大な資金を放出したため、通貨の増大と物資不足が相まって空前のインフレを招いた。闇の横行がこれに拍車をかけたから、一日ごとに物価が上昇し、生活は窮地に追い込まれた。公共料金なども年に2度も3度も値上がりし、たとえば、22年2月に都電は40銭であったが、2月と4月と9月に値上げ



●解放の対象となった農地(22年 上鷲宮)

## 農地改革

戦後の三大改革(軍隊の解散、財閥解体)の一つと呼ばれている農地改革は、マッカーサーの指令により、20年12月29日(第一次農地改革)、21年10月21日(第二次農地改革)の2回にわたって公布、施行された。

日本の農村の半封建的地主制度が農業生産の促進と日本全体の近代化を阻害しているとの理由から、農村の民主化促進、日本経済復興のため不在地主の貸付保有禁止と、在村地主の貸付保有限度を平均一町歩以内とし、それらの土地は原則として農地を耕作していた小作人に売り渡すというものであった。

地主3、自作2、小作5の割合で構成された各市町村の農地委員会が受持ち、中野区では、21年12月27日に設置された。

区内の田中野地区はほとんど市街地化されていて、田畑の大半は田野方地区に集中しており、そのほとんどが老後のためや投資のための小規模な不在地主であった。結局、田6町7反、畑53町1反、計59町8反が農地改革の対象となり1反歩平均850円という安価で売り渡された。



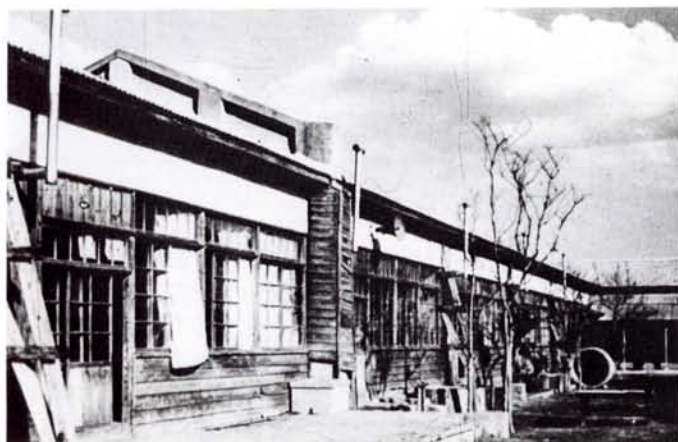
し、9月1日には2円になっていた。

政府は、インフレ対策として、生鮮食品の統制撤廃、新円切替えなどを行い、一時的には収まったかに見えたが、すぐに息を吹きかえた。ついに闇の取締りや物価統制にも乗り出したが、効果は薄かった。

この混乱が一応下火になるのは、24年に行ったドッチラインによる荒療治を経てからであった。その後朝鮮戦争によって特需ブームが起こり、経済は急速に発展した。



●(上)スミぬり教科書  
 (右)運動会では、カぼちゃなどの野菜が景品に(22年 谷戸小学校)〈矢島氏提供〉  
 (下)バラック校舎で授業を再開した(22年)



## 新教育

終戦から2日目の8月17日、学徒の勤労勤員が解除になり、学生たちはなつかしい学校に帰ってきた。10月末から11月初めにかけて疎開学童たちも帰ってきた。しかし空襲で半数近くが家を焼かれ、両親や兄弟の消息のつかめない、いわゆる戦災孤児たちも相当数いた。授業を始めるにも教室は焼かれ、教材もなく、人口流入によって児童数も急増していたため、二部授業を余儀なくされた。しかも食糧難による栄養失調は、子どもたちを襲い、やせて腹がふくれ、無気力で居ねむりをする子どもも多かった。敗戦直後は、弁当の盗難事件があいつぎ、苦慮した教員がGHQに陳情し、区内の小学校に22年1月からララ物資、連合軍放出物資による副食給食が週2日実施されるようになった(その父兄負担金は30~50円位であった)。

文部省は新しい教育方針を打ち出し、20年9月14日「新日本建設ノ教育方針」を発表したが、この根本精神は国体護持であった。そして授業再開に先立ち、教科書の戦争関連記事の部分を削除するいわゆる「スミぬり」を通達。「あまりにスミの部分が多くて意味がわからない」「今までいちばん大切だとされていた部分を今度は消せと、何もかもわからなくなった」という子どもたちもいた。10月10日の「学校勤労勤員令廃止」を最後に戦時教育体制は終わった。22年4月1日から「教育基本法」「学校教育法」が施行され、「6・3制」などの新教育体制へと移行した。



●子どもの頭にDDT散布(21年)

## 保健衛生

戦時中のノミ、シラミにはほとんどみんな困り果てていた。戦後復興で一番早く着手した施策は衛生医療部門であったと言えよう。生活環境は劣悪化していたので疫病も蔓延し、占領軍は米兵の健康を守るため厳しい防疫・衛生対策を行った。とりわけ21年3月から5月にかけて発疹チフスが猛威をふるい人びとを恐れさせた。駅頭で乗降客全員にDDTをふりかけたり、空中散布したり、一斉検診なども強引に実施された。

## 愛の手



●「ナザレットの家」

戦争は人びとを不幸のどん底に陥れた。特に戦災孤児や未亡人などはその日の暮らしにも事かいた。失業者が氾濫している中で就職はおぼつかなく、盛り場へと集まっていた。区内では「愛児の家」や「ナザレットの家」などの施設で戦災孤児を収容し社会の明るい光となった。

戦争を考えた人は、バカだ。  
(男・小学4・「写真展」会場にて)

私がお母さんと離れたらワンワン泣くと思う。昔の人はニコニコして泣かないで、えらいと思う。戦争なんかしないで、最初から、同じに分けたらよかったのに。  
(女・小学2・「写真展」会場にて)

戦争経験者でないほくたちには、「戦争」ということがさっぱりわかりません。しかし、ほくの目で見ただけの戦争は、単なる人の殺し合いとしか思えないし、国のためにやっているとは思えません。  
(石井弘三・中2・「少年の主張」より)

死にたくないのに死んでしまう戦争なんて、大反対だ。もう二度と起こってほしくない。  
(鈴木登美子・高1・弥生町)

戦争に勝ったら領地や賠償金がもらえるなんておかしい。戦争を挑発した国もそれに応じた国も、国際社会で一定期間無視するというようなきまりを作ったらどうか。  
(水内理恵・中学3・「少年の主張」より)

戦争時代の新聞は黄色い、白い紙も作れなかったのかなあ。

戦争時代に生きてた人は、いつばくだんが落ちるかとかビクビクだっただろう。私は、その時代に生まれなくてよかった。  
(女・小6・「写真展」会場にて)

地球は一つしかないのだから、その大切なものを、何億人、何兆人という人たちが、生きて、愛し、そして死んでいったこの地球を、われわれも、そしてわれわれの子孫たちも破壊することはないと信じています。  
(伊知地旬・中3・「少年の主張」より)



なぜ戦争をするんだろう。  
なぜ同じ人間同士が戦いあわなければいけないのだろう。  
いったい何のために戦争をするのだろう。いったい戦争をして何の利益があるのだろう。人は死ぬ。地下資源は使いこむ。無益なことばかりだ。だれがこんな恐ろしいことを始めたのだろう。  
(加藤幸久・高1・弥生町)



私は戦後生まれ、それも高度経済成長期に育って何の不自由も感じない生活を送ってきました。両親は昭和初期生まれだから苦しい時代のことをいろいろ話してくれますから、戦争を題材にしたTVや映画を見ても、たいてい想像はつきませんが、親が戦後生まれの子どもたちは、どういう感じで見ているのかなあ。やっぱり体験者は、ちゃんと知らせておく責任があるんじゃないですか。だって、まだ半世紀にも満たない前のことなのに、ずいぶん昔の歴史上のことのように感じている子どもは多いと思う。  
(K・Y・22歳・「写真展」会場にて)

## 戦争体験者から

私、あの当時女学生でしたから、100%勝つと信じていました。ですから終戦後本当の世の中の有様を知らされた時のショック。私たちは何とんでもない教育を受けたかと、これは忘れられません。結局、教育でぬりこめられていたんですね。今の若い人には、私たちのお上のおことだから、みんながそうするから、と鶴のみにしないで、何が正しいか、自分は何をしなければならぬかをしっかり見きわめる目を養ってほしい

ですね。もうぜったいに戦争は起こしてはいけない。  
(下野和子・56歳・主婦・中野)

勝って来るぞと勇ましくなって、一応格好はつけますよ。そうしないと近所の人にいろんなこと言われるから。でも赤紙来てうれしい者いるはずないですよ。仕方ないとあきらめていただけですよ。今の若い人は赤紙来たら断ればいいじゃないかと言うけど、そんなこと出来るもんじゃないですよ。断ることは死ぬことよりも難しかったんです。  
(匿名)

戦争の前には必ず不景気がありますね。満洲事変の前は、大恐慌でした。満洲開拓団なんて、あれは失業対策でしょ。あれが今度の戦争につながるはじめなんです。

(氏名不明・会社員)

あんなにお腹がすいていたのに国を恨むとか政策を恨むとかいうようなことはなかったのに、敗戦になったとたんに物が無いということに対して、ものすごい反発を感じはじめましたね。それだけ純粋に日本ということを考えてたんでしょうか。  
(原田雅子・56歳・中野)

教育というものは恐ろしいですね。ほくらは陛下のために死ぬという教育でしょう。これをずっと物心ついた時からやられると、それが当たり前になるんですね。反抗することも意見を言うことも許さない。たとえ上官の命令が間違っても従わなければならないのが当時の教育の主体です。たとえば命令がとり消されても何があったんですかと聞くことさえできないんですから。戦争というのは、全くの人殺しでしょ。勝っても負けても



●発言者の年齢は、昭和60年8月15日現在の年齢、町名は現住所  
〈写真／兼子義久氏提供〉

# 戦争って何？ 平和って何？

戦争は、こわい。かわいそう。  
(男・小1・「写真展」会場にて)

実際に戦争を経験したことのない私たちは、写真集で見たものや、本で読んだ事しかわかりません。でも戦争をやっていくら日本が勝ったとしても、必ずどこかに悲しんでいる人や苦しんでいる人がいるはずです。

“40年ぶりの再会”などの記事が報道されない世の中にみんなですることが大事だと思います。

(浮ヶ谷仁美・高1・弥生町)

そういう思いは残るわけです。戦争はもうぜったいになくさなきゃあいかんです。どんなことがあっても。

(田中耕三郎・62歳・元特攻隊長・鷺宮)

軍人が政治家になると、やはり、うまくないですね。戦争というのは、不思議なもので、ズボラでさぼっていた私らみたいのが生き残って、成績のいいやつはみんな死にました。成績いいやつは、どんどん上になっていってしょ。すると逃げるわけにいかない、だから死ぬ。これは今の社会でも同じかな。

(田谷堅次・78歳・中野)

私たちの苦しかった時代のことを今、うちの子どもたちに話すと、ぜんぜん通じません。こんなにお母さんたちはつらい思いをしてあんなたちを育てたんだよ、というと、そんなにつらかったん

ほくの通っている谷戸小学校で、昔、防護団の訓練があったとは驚きました。女の人が竹やり持って練習しているのにはびっくりです。それから戦争前の新聞は、右から書いてあって、戦後になってから左から書くようになったなんて、知らなかったです。

戦災で家が焼かれたり、亡くなったりした人は、かわいそうだと思います。二度と戦争はおきてほしくないです。

(男・小5・「写真展」会場にて)

戦争の本当の恐ろしさは、体験した人でないとわからないと思います。でも私にも多くの人を不幸にしたことはわかります。もう二度と戦争は起こさないと各自が心に誓わなければいけないと思います。

(大矢和加・高1・弥生町)



科学の発達した今では、昔のような戦争はないと思う。でも中近東では、今激しくやり合っている。イランとイラクの石油大国がやり合っている。大事な資源である石油がなくなるのでは？と心配だし、人も町も失ってしまう。これは例外だと省いて、今の平和を喜ぶ人がいるわけではない。

戦争についてどう思うかと聞かれても、難しいし、反射的に、イヤダナァーと思う。

(浦和利之・高1・弥生町)

戦争というとはくたち高校生にとっては、テレビ、映画、本などでしか知ることができません。ほくは当時の写真を見せてもらいましたが、とても残酷で、これが人間の姿かとびっくりすると同時に、心が痛くなりました。

ほんとうに、戦争は名もない多くの人びとの生活を破壊し、悲嘆のどん底に陥れてゆく。誰もが思っていることですが、戦争は、二度とやってはいけないし、戦争の時のことを忘れてはいけないと思います。

(松本雄一・高1・弥生町)

ほんとうに、戦争って空しいですね。こらえてこらえて、耐えて耐えて、最後は焼野原に放り出されて。もう二度とあんなこと、夫や子どもを戦場にやってなるものかと思います。

戦後生まれの人たちは、ほんとうの意味での平和のありがた味や言論の自由の尊さというのがわかっていないのかしらと疑問に思うことがありますね。

(匿名・自由業)

戦後獲得したものは、デモクラシーというか、人の人権を侵さず、侵されないという大原則だと思うのです。これは人間として一番大切なものですから、大事にしてほしい。今の若い人たちは、また次の後輩たちに大切に伝え続けてほしい。

(竹中俊祐・56歳・新宿区)

なら、どうして反対しなかったんだ、自分たちは被害者だと思っているからそんなことをいうんだ、ほんとうは加害者でもあったんだと、こう言うんです。

戦争反対なんて夢にも思ってませんでしたね。言われたことに従うことだけ考えて、そういう風に育てられていたんです。今の子どもたちには理解できないでしょうね。

(匿名)

二度と戦争を起こさないために、教育は特に重要です。最近、教科書の検閲が厳しくなってきたのは見逃せません。日支事変に向けて、「小学校の読方」が「サイタ、サイタ、サクラガサイタ」から、「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」に変わって戦争に突入。この事実からも、教科書検定などから目を離してはいけないと思う。(男・50代・会社員)